買い物に行く活動・調理する活動・食べる活動・友達にも食べてもらって喜びを味わう活動など、多様な活動が展開できた。

・２つの障害児学級が連携して取り組めたことで、仲間意識が持て、つながりが深くなった。

・自分たちの活動について、原学級で語ったり、新聞作りをする、展示するなどを通して、障害児学級の活動を知らせることができた。

（課題）

・学校の中だけでなく、地域の方や保護者など、関われる範囲を、意図的にもっと広げていけるとよい。

・今年度の活動の成果を、来年度にも、さらに発展させていきたい。
（例えば、今年とれた豆を、来年度も育て、収穫し、別の利用法に広げていくなど）

総合的な学習　―白川小『地域福祉学習』の中から―

『炭焼きのひみつをさぐろう』の実践

自分らで焼いた木炭や竹炭販売

亀山大市で白川小児童

【亀山】亀山市白木町の白川小学校（山川誓一郎校長、三十八人）の三、四年生九人は二十六日の亀山大市に「総合学習ブース」を出店し、総合学習で焼き学習で焼いた木炭、竹炭、木竹さく液を販売した。

炭焼き学習は、地域の炭焼きサークル「小川炭サークル」の十二人の会員らの指導で昨年九月に炭焼き窯を作り、共同作業で三回、炭を焼いた。

今回販売するのは、その時に作った木炭六十キログラム、竹炭十キログラム、木竹さく液（五百ミリリットル）五十四本。写真百枚もパネル展示し、活動の様子を紹介している。

四年生の女子は「最初は恥ずかしかったけど、たくさんの人に買ってもらえて、とてもうれしい」と話し、にこやかに接客をしていた。

川口謙次教諭は「人とかかわり、つながる力を付けようと今回初めて出店しました。大市で亀山のいろんな人と交流して、その中でいろんなことが学べたら」と話していた。

客に笑顔で接する白川小学校の3、4年生＝亀山市本町の亀山大市会場で

白川小学校

松岡秀子

1. 単元と目標

「炭焼きのひみつをさぐろう」（3・4年）

１学期・・・「昔の窯跡を調べよう」

・自分のおじいさんやおばあさん、地域のおじいさんやおばあさんから聞き取り学習を通して、炭焼き小屋の場所や昔の炭焼きの様子を意欲的に調べる。

・多くの高齢者と関わる活動を通して、人とつながる力をつけ、地域の温かさや魅力に気づき、自分の住んでいる地域が好きになる。

２学期・・・「炭焼き窯を作って、炭を焼こう」

・地域のおじいさん、おばあさんから炭焼き窯の作り方や炭の焼き方を学び、地域に協力を求めながら、手作りで炭焼き窯を作り、自分たちの手で炭を焼く。

・地域のお年寄りとともに学ぶ学習活動を通して、その技や知恵のすばらしさにふれ、ふれあいを深める。

・自分たちの学習をインターネットで発信し、炭焼きの盛んな地域の子どもたちと友だちになる。

３学期・・・「自分たちが作った炭や木竹酢液を大市で売ろう」

・亀山大市での活動を通して、多くの人たちと交流を楽しみ、人と関わりつながる力を育てる。

・自分たちが作った木炭や竹炭、木酢液を、より多くの人に知ってもらうことで、自分たちの学習活動をより広く発信する。

2. 単元によせる思い　　地域を歩いて（教師の事前学習）

白川は昔、炭焼きが盛んであった。それぞれの集落で何人かがグループを作り、共同の窯をつき、炭焼き小屋を作った。集落に近い窯では、主に自家用の炭を作った。とりわけ寒い冬を迎えるころは、暖房用に、それぞれの家族が順番に窯を使い、炭を焼いた。

山沿いに位置する小川地区には、炭焼きを本業とする人たちがいた。その人たちは、炭材の木を求め、山の中腹や頂上近くにまで出かけ、窯をついた。地域のお年寄りからは、親子で山を買い、炭焼きをしていたという話や、滋賀県まで炭焼きに出かけたという話をお聞きした。自家用の炭を作るための窯が集落の近くにあったのに対して、炭焼きを本業としていた方たちの窯は、山奥までよりよい木を求めて入っていくため、山の中に作られることが多かったようである。昭和２０～３０年当時、白川には炭焼き小屋が３０から４０もあったという話である。

現在、白川には、昔の炭焼き窯は、ほとんど残っていない。昔、窯があったところの多くは、道路になっていたり、竹藪や草原になっていたりする。しばらくの間途絶えていた炭焼きであるが、数年前、小川地区のお年寄りが集まり、「小川炭サークル」という炭焼きの会を作った。窯は、にごり池の近くの広場にすえられ、定期的にお年寄りが集まり、炭を焼いている。活動は盛んで、今までに６０数回の炭焼きをしたということである。できた炭は販売しているが、「商売でもうけるのではなく、こうしてみんなで集まっていろいろな話をしながら作業する」のが目的だそうである。会のメンバーは、子どもたちの祖父母より少し年齢の高い方たちである。世話役の浅野さんを中心として、サークルのおじいさん、おばあさんは実に生き生きと作業を進めていく。気心の知れた者同士、和気藹々の共同作業である。熟練の技がいる作業も阿吽の呼吸で手際よく進められていく。

子どもたちとおじいさんおばあさんのことをウエビングする中で、子どもたちが炭焼きについても素朴な疑問を持ち始めた頃、私たち教師も地域を歩き、地域の人にであい、そしてまた、この炭焼きの魅力に何故かひかれ始めていた。木炭や竹炭の効用については聞いていた。それ以上に、何よりもでんと座っておじいさんたちと呼吸をともにしているような炭窯にひかれ、おじいさんたちに語られるといろいろな表情を見せる煙、体中にしみこむ煙の匂いにたまらなくひかれていた。

白川で盛んだった炭焼きの仕事を調べれば、自分の祖父母、地域のおじいさんやおばあさんの生きてきた歴史にふれることができる。また、小川炭サークルのお年寄りから炭焼きの様子を聞き取ったり、一緒に炭焼きをしながら学ぶ活動は、子どもたちが、地域のお年寄りと直接ふれあい、その生き生きとした姿にふれ、その知識や技術のすばらしさに気づくことができる学習であると考える。地域のよさ、おじいさん、おばあさんの温かさに気づき、自分の住む地域に愛着を持てる子になってほしい。そんな願いを持ちながら、子どもたちの素朴な疑問や自発的な思いを大切にしながらともに学んでいきたいと考えていた。

3. 学習の流れ

① みんなでウェビングしよう
② 小川炭サークルとの「であい」
　・炭焼き体験学習
③ 炭焼き学習でこれからしたいことは何
④ 昔の炭焼きの様子・窯跡を調べよう
⑤ みんなに知らせよう
⑥ １学期の学習の整理とまとめをしよう
⑦ 炭焼き窯を作ろう
⑧ 炭焼き窯に看板を立てよう
⑨ 壁の石積みはパズルみたい
⑩ いよいよ天井づくり
⑪ いい炭を焼くぞ
⑫ 炭だしと２回目の炭焼きの準
⑬ ２回目の炭焼き
⑭ ３回目の炭焼きを終えて
⑮ 亀山大市で売ろう

4. 成果と課題

３．４年生では、総合学習に「炭焼き」をとりあげ、年間を通して取り組んできた。　１学期の昔の窯跡調べでは、子どもたちと、自分の祖父母や地域のおじいさんやおばあさんとの新しい出会いがあったように思う。この学習を通して、今までは気づかなかったり知らなかったしたお年寄りの生きてきた歴史、一昔前の地域の様子の一端を知り、高齢者を見る目や地域に対する思いをより温かくすることができた。子どもたちは、窯跡を調べるために、地域を歩き、いろいろな人とであい、ふれあうことができたが、そんな学習を通して、自分

が求めれば、地域のお年寄りが骨身を惜しまずその思いに答えてくれる、その暖かさを実感できたように思う。

２学期の炭焼き窯作りと炭焼きの学習では、小川炭サークルのおじいさんやおばあさんのお世話になりながら、ともに作業し、ともに学ぶことを通して、その知恵や技術のすばらしさに気づくことができた。おじいさんたちが何気なくやっている作業でも、自分たちがやってみると大変なこと、うまくできないこと、簡単そうに見えることでも、決められた手順やこつ、長年の経験が生かされていることを知ることができた。そして、ともに活動することを通して、その心の温かさに触れ、自分たちが地域の人から暖かく見守られているのだということに気づけるようになってきた。

自分たちが真剣に問えば答えてくれる大人がいる、助けてくれる大人がいる。そういう大人への信頼感が子どもたちの心の中に「人と関わり、つながる力」を大きく育てているように感じる。

３学期の課題は、自分たちの学習をより多くの人に知ってもらうこと、地域の人だけでなく、より広く多くの人との関わりやつながりを作っていくことである。そのために、まずは、亀山大市での炭の販売を考えた。かねてからの子どもたちの願い―おじいさんたちの様に製品として売りたい―をいよいよ実現する活動に子どもたちは向かっていた。インターネットで宣伝をし、のぼりを作り、ラベルをデザインし、自分たちの活動を伝えたいという思いも膨らんでいった。

また、インターネットで炭焼き学習の発信をしたいと考える。１学期の炭焼き学習の話し合いの中で、子どもたちは、他の学校の子たちと炭焼き学習の交流をして、たくさんの友達を作りたいという思いを出している。３学期は、他の学校の子どもたちとの交流を図り、同年代の子どもたちとの関わりやつながりを作りたいと考える。

やまもも学級の視点から　Ｋ３年生

炭焼きのひみつさぐりの活動は、Ｋにとっても地域にふれる大きな経験になった。

炭焼きの体験活動では、窯出しの炭を大事に運ぶ力かげん、炭出しの後の窯の中の暖かさ、薄暗さ、みんなで順に手渡しながら窯入れをする木の重さ、炭を焼くあたりに立ちこめる煙の匂い、作業や休憩時のおじいさん、おばあさんの談笑など**体を通して地域が残る**。そして、何よりも**地域の人たちとのふれあい**としても貴重な時間となった。

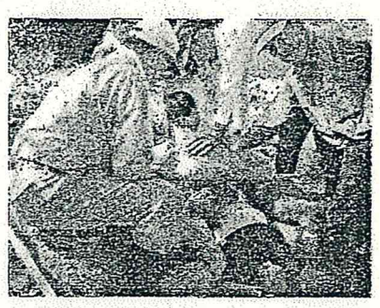
体験活動の日、いつもと違う日課や学習形態をとるので、保護者に前日からの生活リズムなどもお願いし、あれこれと案じたが、３・４年の仲間が一緒なので当たり前のように合流した。炭出しの後の窯の中へ入れて貰おうという時、予想通りすごい力で逃げようとした。すると窯の中から「Ｋちゃんおいで。」と友達の声。「Ｋちゃん入るよ。」と背中やお尻に触れる別の子の両手。一瞬力が抜けるのが分かり、Ｋは穴の中にいた。この時、子どもたちは考える前に自然にこの行動を起こしていた。出てきてから、ぽそっと「Ｋちゃん入ったな。」と嬉しそうだった。**小川炭サークルのおじいさんたちは、そんな子どもたちの関わり方を自然に見聞きしてくれていた。**浅野さんが、Ｋに話しかけてくれる雰囲気が、だんだん子どもたちのそれと似てきたような気がする。

聞き取り学習では、白木チームの子たちと一緒に地域の家を訪問した。通学路から離れた路地を通り、友達のおじいさんやおばあさん、近所のおじいさんやおばあさん、知らない家のおじいさんやおばあさん、活動が進むにつれて子どもたちの人との関わりや行動半径が広がっていく。Ｋの家へは兄妹の友達が遊びに来ることが多いが、Ｋ自身は遊びに行ったり他の家を訪問する機会は少ない。また、聞き取りや体験学習を通して、子どもたちがおじいさんおばあさんを総称ではなく個人名で呼ぶようになった。

ある家では、子どもたちが勉強にくるということで、人数分の座布団を敷き、手作りおやつを作って待っていて下さった。聞き取り学習の途中でＫが集中できないのを感じてか、おばあさんがＫに一足先におやつを勧めてくれた。するとおじいさんが「Ｋちゃんも勉強中だから、今はあかん。」とおばあさんを諭された。静かな短い会話であったが、二人がＫのことを大切に考えてくれているのが伝わってきた。

また、**炭焼き学習の経験は、Ｋの家庭へ地域が入り込む**ことにもなった。今まで炭を使うのを見たことがないというお母さんは、Ｋがもらって帰った竹炭を早速使い始めてくれた。一度だけ小学校６年生の時に焼いたことがあるというおじいさんも、同級生が今も小川炭サークルで炭を焼いていることを興味を持って思い出してくれた。**Ｋのおじいさんへの聞き取り学習**を通して、家庭と学級の子どもたちとのつながりもさらに広がっていった。

聞き取り調べ学習のＫの発表は、同じチームの子たちが考え、Ｋのおじいさんが教えてくれた炭焼き窯跡を発表することになった。**Ｋと一緒に活動した経験の中から言葉を選び、みんなが発表の言葉を分担した。**授業日は熱のため欠席し残念だったが、そのあとの白川っ子タイムで、写真を見せたり友達と指示棒で地図の場所を指したりして発表することができた。まわりの子たちは、共に生活し、共に活動した経験から、Ｋの意をくみとろうとする。それがとても自然である。**学習の中でそのような姿に支えられながら、Ｋ自身に経験させたいことが一つひとつみえてくることが多い。それを支援していくための手だてが大切であると考えている。**



２学期になり、いよいよ、窯作りの活動に入った。活動の見通しは持ちにくいだろうが、穴が大きくなり、築めた石の山ができ、切り出した木をそろえ、窯をつく、そんな一連の作業を通してみんなと一緒に作り上げていくことを感じ取るだろう。さらに、何度か繰り返していく作業の中で、**Ｋのこだわり**…例えば、泥が靴の裏や手に付くのがとても嫌いで避けずにはいられない…**が少しずつ取れてきている。**また、日常生活の中ではなかなか経験できなかったこと…意識的に重いものを持ち上げるとか道具を使うなど…を繰り返して**体が覚えていっている**ようである。

小川炭サークルのおじいさんたちが応援にきてくれるようになった。来てくれたおじいさんのもとへみんなと一緒に駆け寄っていきながら、**だんだんとおじいさんに慣れていく。**いつの間にか、**おじいさんが直接Kに話しかけていることが増えた。**おじいさんの短い言葉、低い声、ゆっくりとした物腰が落ち着くようである。

木入れをして、むしろをかぶせて、さらに土をおいて天井をつくるという窯作りの山場の作業の日、Kは定期検診のため遅れて登校した。その頃みんなの気持ちは「いよいよ土をかぶせるぞ。」と最高潮であり、Kは、泣き、怒り、スコップには少ししか土が入らず、それも違うところにまいて、**混乱をしていた。**子どもたちもそれに気づき、「一緒に運ぼ」「こっちやに」などと関わろうとするが、Kは声をあげ、気持ちを押さえられないでいた。「Kちゃん、朝の会をしてへんもんな」「そうや」当番の子がよく通る声で「挨拶をします。おはようございます。」スコップの手を止めあちこちで子どもたちが「おはようございます。」**いつものリズムを取ること**を子どもたちが気づき実行した。おじいさんたちは、黙々と仕事をしながら、Kや子どもたちの様子を見てくれていた。

10月17日、はじめての炭焼きをした。この炭焼きによってはじめて窯が完成することにもなる。子どもたちはこの窯に『みんなの力と希望がつまった　ミニ白川窯　３４号　いっぱいつかうぞ』と名づけ看板を作った。裏には完成の日と子どもたちの名前、そしておじいさんたちのサインが刻まれた。炭焼きに先がけての学習には、おじいさんたちが先生として参加し、おじいさんたちにとっても初窯はそう何度もない機会で、まさにともに学ぶ日であった。私たちは、おじいさんたちが、ゲストティーチャーではなく**パートナー**であったことを実感した。あらしをせめる、かんとかげん、煙が教えてくれる、焼いてみなわからん‥実に名言だった。この日の学習にはKの祖父母が揃って参加をし、ともに学ぶ子どもたちの姿、パートナーとしてのおじいさんたちの存在を感じてくれたように思う。

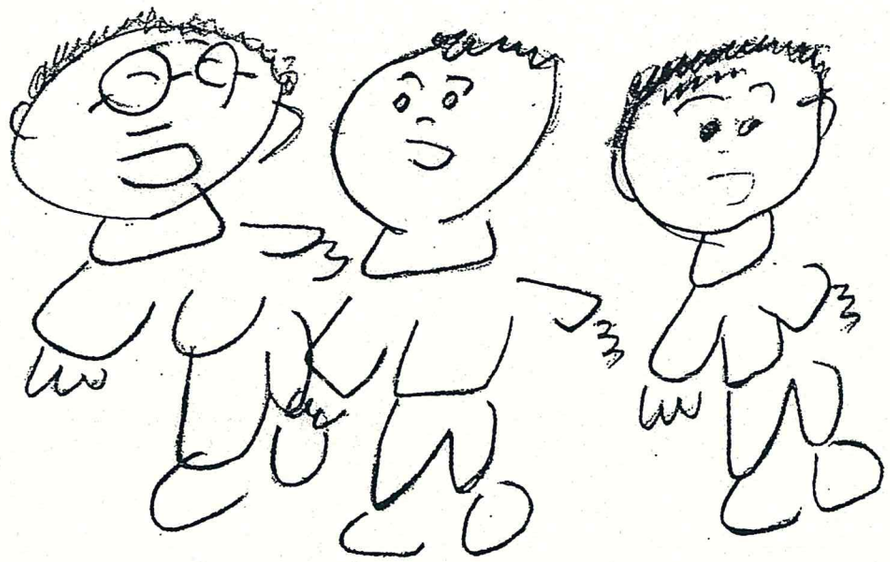
11月、12月と３度の炭焼きをした。くりかえし、くりかえししていく作業は、Kに先の見通しをもたせやすくしているように思う。さらに子どもたちの思いは広がり、３学期には『亀山大市』で炭と木竹酢液のお店をだそうと計画と準備が始まった。 昨年は、お母さんに抱かれ通しだった大市でのKであるが、今度はどんな姿を見せてくれるだろうか。仲間と一緒の活動は続いていった。

『亀山大市』では、予想以上の盛況で津市のあたりからも木竹酢液の効用を知っている人たちがまとめて購入に来てくれたり、インターネットで見たという亀山の人も来てくれていた。Kも店番や、交代で大市見学に出かけたりもした。人との関わりという点でまた新たな課題がみえてきた日でもあった。

Kに体を通して地域を感じさせたいと願った総合学習の取り組みは、地域の人たちに、まわりの子どもたちの姿を通して、そのままのKを知ってもらえることにもつながっていった。また、ともに学ぶ中でみえてくるものが、K自身の課題として学習の中で位置づけることができたと思う。

ともに学ぶ授業作りをこれからも一つ一つ積み上げていきたい。

ことばの広がりをめざして



亀山西小学校

片岡充子

① 遊具を使って、吸う・吐くの練習

② ピアニカの練習（ドレミ　をひいたり、彼の好きな曲・チューリップを彼の指を私が持ってひいたりした。もう一度ひいてほしいときは、私の指を鍵盤にもっていったり「モウイッカイ」「チュウリップ」と言った。彼の好きな曲もどんどんひろがっていったのでその曲を弾いた。）

③ ノートに私が小さい〇、大きい〇を描いてその上を彼が鉛筆でなぞる練習。（さらに三角、四角、曲線、直線）

時間にして、約２０分。一定の時間机に向かえること、鉛筆が正しく持てること、私の指示に従えることを目標にした。

クレパスでは絵を描こうとしなかったので、絵の具で挑戦した。しかし、かれは絵の具をパッレトに出すと筆ですくい上げ、そのままバケツに入れると筆でかき混ぜ、色水をつくって夢中になった。瞬く間に絵の具はなくなるし、水は濁るし。彼は、これを繰り返した。私は、絵を描くことを考えたが、彼にとって水がキャンパスなのだ、色水を作り、変化を楽しむ、これも芸術と考えた。そして、その時間の最後に少し〇や三角を描いた。（絵の具がもったいないと思いはらはらしていたら、販売部の固めの絵の具を無料でもらい、今も色水をたのしんでいる。）

彼の好きなあそびに色カードを眺めて模様作りがあった。そこで、白表紙を色カードの大きさに切って渡し、赤や青の絵の具を塗ることを要求したら彼は喜んで色塗りをして、絵筆を使うことができた。

今の授業のパターンは、先のパターンに加えて

① 〇や線の練習に１，２，３の数字を加えた

② □□□□□□□□□□ このますへおはじきを並べ、指を指して１から１０までを数える。

③ デジカメで先生や学校のいろんな場所を撮り、それを使って言葉の習得をする。

④ 授業の初めに「勉強はじめます」、「〇〇を持ってきて」「渡して」などの言葉を意識して使う。　　時間にして約３０分

３　今後の方向と立ち止まってしまったこと

「学校はチャイムで始まり、終わる」というのが理解できたみたいで、休み時間になると彼の癒しの場（学校の裏山）へ行き、チャイムがなると教室にもっどてこれる。

今後の授業では

① １体１対応を学ぶ

② 言葉の習得からひらがなへ

③ ライトねんどで〇や▲を作ったり、はさみで紙を切る作業をする。

以前はピアニカを吹くことをそれほどいやがらなっかたのに今はかたくなに拒否している。ピアニカの吸い口を拒否しているみたい。

仲間と共に生き、地域とつながる学校づくりをめざして

白川小学校　松岡　秀子

総合的な学習３・４年　―白川小「地域福祉学習」の中から―

「『私たちの炭焼き』から広がろう」の授業実践

共に生きるとはどういうことだろうと考えてみる。「ともに」のとらえ方は人によっても学校によっても地域によっても微妙に違いがあることに気づくことがある。
障害児を含めた「すべての子ども」を視野に入れた場を作っていく学校のとりくみは、共生共学をめざす根っこの部分であると思う。共に学ぶという視点での授業作りも、生みだし積み上げていきたいもののひとつである。

２００３．１．２５　亀山大市にて

H15

白川

『私たちの炭焼き』から広がろう」の授業実践

1. 単元と目標

「炭焼きのひみつをさぐろう」（1年目）

1学期・・・「昔の窯跡を調べよう」
2学期・・・「炭焼き窯を作って、炭を焼こう」
3学期・・・「自分たちが作った炭や木竹酢液を大市で売ろう」

「『私たちの炭焼き』から広がろう」（2年目）

・地域のおじいさんやおばあさん、仲間と一緒に手作り窯で炭を焼く。
・炭焼きや焼いた炭を商品にして販売する活動を通して、自分の課題をもち、工夫しながら解決しようとする。
・おじいさんたちの思いやお客さんの声を聞き、炭作りを広がりを持って伝えようとする。
・炭作りや商品化、販売活動を楽しみながら、自分たちの活動や思いを意欲的に伝えようとする。

2. 単元によせる思い　　地域を歩いて（教師の事前学習）

白川は昔、炭焼きが盛んであった。それぞれの集落で何人かがグループを作り、共同の窯をつき、炭焼き小屋を作った。集落に近い窯では、主に自家用の炭を作った。とりわけ寒い冬を迎えるころは、暖房用に、それぞれの家族が順番に窯を使い、炭を焼いた。

山沿いに位置する小川地区には、炭焼きを本業とする人たちがいた。昭和20～30年当時、白川には炭焼き小屋が30から40もあったという話である。

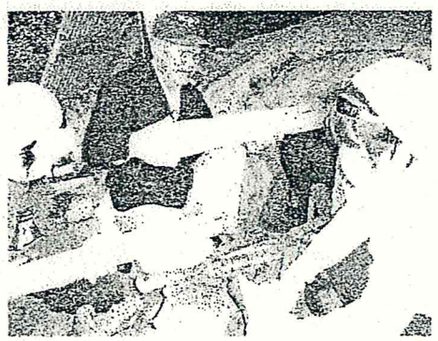
現在、白川には、昔の炭焼き窯は、ほとんど残っていない。 昔、窯があったところの多くは、道路になっていたり、竹藪や草原になっていたりする。しばらくの間途絶えていた炭焼きであるが、数年前、小川地区のお年寄りが集まり、「小川炭サークル」という炭焼きの会を作った。窯は、にごり池の近くの広場にすえられ、定期的にお年寄りが集まり、炭を焼いている。活動は盛んで、今までに６０数回の炭焼きをしたということである。できた炭は販売しているが、「商売でもうけるのではなく、こうしてみんなで集まっていろいろな話をしながら作業する」のが目的だそうである。会のメンバーは、子どもたちの祖父母より少し年齢の高い方たちである。世話役の浅野さんを中心として、サークルのおじいさん、おばあさんは実に生き生きと作業を進めていく。気心の知れた者同士、和気藹々の共同作業である。熟練の技がいる作業も阿吽の呼吸で手際よく進められていく。

子どもたちとおじいさんおばあさんのことをウエビングする中で、子どもたちが炭焼きについても素朴な疑問を持ち始めた頃、私たち教師も地域を歩き、地域の人に出会い、そしてまた、この炭焼きの魅力に何故かひかれ始めていた。木炭や竹炭の効用については聞いていた。それ以上に、何よりもでんと座っておじいさんたちと呼吸をともにしているような炭窯にひかれ、おじいさんたちに語られるといろいろな表情を見せる煙、体中にしみこむ煙の匂いにたまらなくひかれていた。

白川で盛んだった炭焼きの仕事を調べれば、自分の祖父母、地域のおじいさんやおばあさんの生きてきた歴史にふれることができる。また、小川炭サークルのお年寄りから炭焼きの様子を聞き取ったり、一緒に炭焼きをしながら学ぶ活動は、子どもたちが、地域のお年寄りと直接ふれあい、その生き生きとした姿にふれ、その知識や技術のすばらしさに気づくことができる学習であると考える。地域のよさ、おじいさん、おばあさんの温かさに気づき、自分の住む地域に愛着を持てる子になってほしい。そんな願いを持ちながら、子どもたちの素朴な疑問や自発的な思いを大切にしながらともに学んでいきたいと考えた。

Ａ児にとっても地域にふれる経験になって欲しいと願った。体を通して地域を残していきたい。そして、何よりも地域の人たちとのふれあいとしても貴重な時間となり、まわりの子どもたちの姿を通して、そのままのＡ児を知ってもらえることにもつながっていくだろうと思った。友だちとの活動の中からきっとＡ児にもつながる学習が見いだせるだろうと考えた。

3. 単元について



２年目の土台になる活動は、昨年度から子どもたちの中で引き継がれてきた「地域の人たちも巻き込んだ炭焼き」である。小川炭サークルの方々とともに進めてきた炭焼き（窯作りと炭焼き）はミニ白川窯として目に見える形で残り、初窯での炭焼きはその後に続く自分たちの炭焼きとともに子どもたちに貴重な体験となり、複式学級のありがたさで、次の学年の子たちにより精選された形となって残ろうとしている。

総合的な学習の今年のテーマである「発信活動」という視点でこの炭焼きをとらえるとき、まずは伝えたくてたまらないことを一人ひとりの子どもの中に蓄積することがとても大切だと考える。お年寄りの生き生きとした姿、その知恵や技のすばらしさ、お年寄りの生きてきた歴史や生活の一端、販売活動を通して出会った人たち、子どもたちの活動に関心をもち暖かいまなざしで支えてくれている家族や地域の人たち、炭を介して様々な人やものとの出会いがあるが、子どもたちはまだしっかりと意識してはいないものでもある。

炭焼きそのものの伝達が本来のねらいではないと考えるが、子どもたちの五感に常に残っている活動でありたい。そういった意味でも、何回かの炭焼きをおりまぜて学習を進めていきたいと考えた。

Ａ児については、とにかく“みんなといっしょにやってみる”ことから始まる。Ａ児にとって興味や関心、自ら課題をもって取り組むという視点はとても難しいことであるが、始める（経験する）ことから興味のきっかけをつかむことができる。繰り返すこと

により慣れ、慣れることで自信ができ関心が起こる。それらを通してつけたい力は、日常生活に必要な力、社会生活に使える力、そして、人と何らかの形で関わりながら生きていくという力である。自立活動としての日常生活指導・生活単元学習との相互作用によって身に付かせていきたいと考えている。例えば、道具を使う、自分の力で物を持ち上げる、ひもを結ぶ、集中して作業をするなど、経験を思いおこさせる身振りを交えた物の名前や動作の言葉にふれるなど、また人と関わる時にはその人と向かう、相手を意識して物を渡すなど、その子の特性をふまえたあいさつの仕方など一つ一つ課題となってくるだろう。発信という意味では、表出言語を持たない（おそらく内言語もごく少ない）ので、みんなと全く同じ活動をめざすのではなくて、活動の中でA児の好きな写真を活用したりキーワードをなぞり書きしたりして工夫支援をしていきたい。また、見通しを持って自ら動き出す姿をA児の発信の姿ともとらえたい。

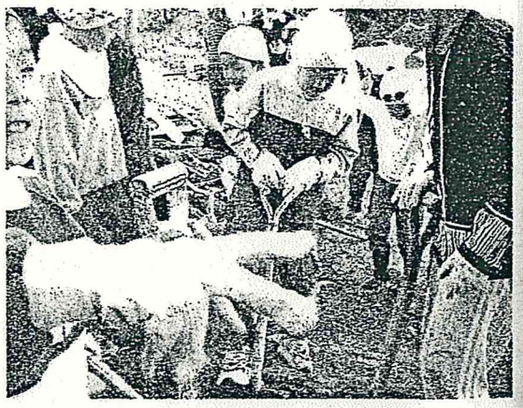
4. 学習の流れ（2年目）

(1)今年も炭焼きをしよう

４年生の「昨年した炭焼きを今年もしたい。また亀山大市で炭を売りたい。」という声に３年生からも「やってみたい。」という声が出て、昨年に引き続き炭焼き活動をすることになった。小川炭サークルのおじいさんたちも快く引き受けてくださった。１学期は３年生にとっては全てが初めての経験で、４年生は昨年のことを思い出し、確認するといった時間になった。４年生のA児にとって、昨年１年間の経験の上に立って繰り返し活動できる絶好の機会である。

(2)まずは体験してみよう

３・４年全員が炭焼き窯に入り昨年度末にすでに焼いてあった炭出しをした。暗い窯の中にやがて目が慣れてくると、おそるおそるながら全員が自分から中に入り狭い窯の中での動きを考えるようになり、連携プレーで炭出しの作業を経験していった。翌日には４人の小川炭サークルのおじいさんたちの力を借りて木入れ作業を行い、早速火入れをした。この一日で子どもたちにとって小川炭サークルのおじいさんたちはぐっと身近なものになった。おじいさんたちも、「あんたは〇〇さんとこの孫かな。」などと聞きながら、子どもたちに関わり、煙のことや温度のことを独特の口調で教えてくれた。腰を据えて重い木を運ぶ姿はまさにプロで、子どもたちもおじいさんという呼び名がすぐに巌さん、市橋さん、清治さん、朗さんというふうに変わっていった。A児の行動も落ち着いていた。全てが初めての昨年に比べ私たちにもA児にも何らかの見通しが見える。おじいさんたちの姿を見ると自分から窯の近くに駆け寄っていく。昨年は、友だちが行くから行くというふうだったの



に。おじいさんたちも直接A児に関わってくれて自然である。会話は成り立たないが、短い言葉でゆっくりと語りかけてくれる。そのトーンはA児は落ち着くようである。

(3)商品作りをしよう

子どもたちの手作業ではかなり時間がかかったが、１つ１つ手順を確かめながら進めていくことにより、初めての３年生にもわかりやすい作業になり、４年生にとってもそれまで上級生に頼っていた姿から見通しを持って作業を進めていく姿に変わっていったように思う。

A児も昨年すでに経験した作業であり、さらに繰り返し繰り返ししていくことは落ち着いて取り組むことができ、そおっとやさしく竹炭を切ったり、丁寧に洗って並べたりする姿を３年生は「じょうずやなあ。」ととても自然に見ていた。初めての３年生にわかりやすいように配慮することは、A児にも大変分かりやすい。A児に活動しやすく配慮することは、みんなが仕事を進めて行きやすくなる。また教師もA児に関わりながら３年生の援助をすることもできる。

(4)ポスター・チラシ・通信を作ろう

ポスターやチラシを作り、他校の友だちや親戚の人に配ったり、地域のお店に置かせていただいたり、学校の玄関の炭コーナーに置いたりして活動しているうちに、購入してくださる人が増えてきた。小川炭サークルの人に紹介されたと言って来てくださる人や地区会議が主催するバーベキュー大会にもたくさん買ってもらえた。チラシを見て初めて白川小を訪ねてくださる人もいて子どもたちは喜んだ。炭を介して新たな人との出会いがある。漠然としていた「他の人たち」が、身近に現実のものとなった。炭を夏休みにはいる前には、昨年の木炭も今回の木酢液・竹炭も完売した。「また炭焼きして商品作らな。」と子どもたちは張り切った。待ってくれている人もいる。A児が作った大きなポスターは学校玄関脇の炭コーナーの看板になっている。

(5)ウェビングをしよう「私たちの炭焼き」

子どもたちの関心は、①伝えていきたい炭作り　②じょうずに作りたいかぼちゃ・ひょうたん炭　③小川炭サークルのおじいさんやおばあさんのこと　④たくさんの人に使って欲しい、売りたい私たちの炭　⑤パワーアップしたチラシやウェブページ　⑥調べてみたいことがある　などであり、自分一人でのウェビングでは気づかなかったことにも関心を見せた。 まずは、１０月末に計画している炭焼きにむけて子どもたちの関心は②にありここから学習を始めていくことになった。

A児には、話し合い活動が長くなると集中することは辛いことである。できるだけ視覚で訴えるように工夫したり、小さな活動や動きを取り入れるように心がけた。

(6)かぼちゃ・ひょうたん炭をじょうずに作りたい

じょうずな炭作り、そのための心配なことを話し合った。今栽培中のかぼちゃのこと、収穫したかぼちゃのこと、窯の中に入れた時のかぼちゃのこと、窯だしの時のかぼちゃのことを自分なりの解決の方法を考え、やはり小川炭サークルのおじいさんたちに聞き

たいということになった。

早速次時にお願いしたところ、おばあさんが快く来てくださることになった。

あいさつ→おばあさんから子どもたちの手紙のお礼→手紙に書かれていた質問への簡潔な答え→おばあさんの言葉「くさったかぼちゃもほどほど」「じょうずに焼く研究」を柱に→心配事と自分たちの考え・特に窯入れの工夫は、それぞれの子が描いた絵を見せながら、聞いてもらう→おばあさんの答え（実物を使って）→みんなで実習　というふうに流れ充実した時間になった。あとで知ったことは、おばあさん自身が授業の流れを組み立ててみえたことである。持参の実物は、失敗した炭や成功した炭、かぼちゃ以外にも炭になる作物、麻袋、綿の布など、子どもたちに話すときにあるといいと思われたものを吟味してきてくださったのだと思う。子どもたちに用意をしておいてと事前に連絡があった“いっとう缶”は参観の保護者がＡ児の母親も含めて何人も持参できてくださりありがたかった。

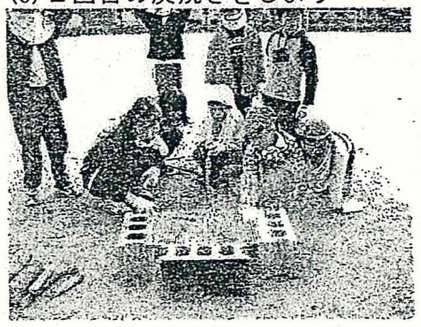
かぼちゃを麻や綿の袋で包み、麻のひもでくくる活動が途中で入ったが、Ａ児の「日常生活」の学習で長期に渡って取り組んできた「包む」「結ぶ」が実践できるチャンスであった。同じパターンではできても場所やものが変わると適応しにくいということをあすなろ学園の先生からお聞きしていたが、麻ひもの端を持ったらいつもの動きに入ったときは感動した。これを機会に大小のものをつつんだり、いろんな素材のひもを使ったりして発展させていけた。

(7) 私たちの炭、たくさんの人に使って欲しい、売りたい

ウェビングの④⑤に関わって、自分たちの炭焼きをＰＲするということについて考えたところ、子どもたちからは、①ポスターやチラシをバージョンアップする　②パソコンを使ってウェブページを作る　③今までと違う場所で売る　④商品を買ってもらったときにアドバイスをする　⑤ミニ白川窯を見学してもらう　などの意見が出た。

バージョンアップしたチラシやポスター、『白川窯通信』、のぼりを作りは、１月の大市出店を視野に入れた活動にもなった。Ａ児は大市で売る時のための、のぼり作りに取り組んだ。

(8) ２回目の炭焼きをしよう



今回は、本から情報を得てブロックで作ったかまどを使っての炭焼きにも挑戦。火がつかなかったり、やけすぎて灰になってしまったり、しかし、小さな松ぼっくりや木の実が少しだけ焼けた。「こんな方法もあるんやなあ。」といってくれたおじいさんの言葉に、子どもたちも満足そうだった。

(9) 大市で売ろう

３学期に入って、２回の炭焼きをした。１回は自分たちだけでのブロックかまどでの花炭焼き、もう１回はおじいさんたちとの炭出しと炭焼きである。大市での出店という目標が迫っており、また子どもたちにとって、見通しが見える活動になってきているので、炭焼きにも商品作りにも拍車がかかった。

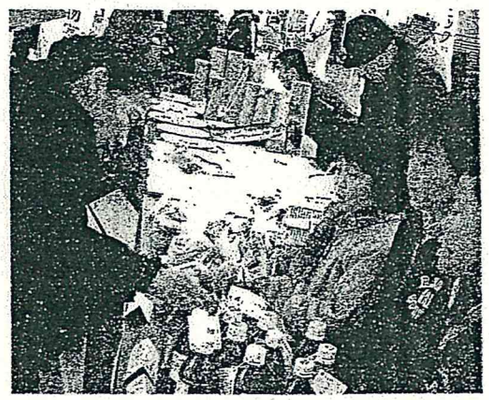
Ａ児にとって、昨年の大市は人との関わりという意味でいくつかの課題を残した。家庭や学校の中では気づかずにすぎてしましまいがちになることが、外の世界や他人との関わりの中ではっきりと見えることがある。

生活単元学習の中で、当日の動きを想定していくつかのパターンの買い物ごっこを毎日少しずつ繰り返した。例えば、人にものを渡すとき、Ａ児に渡すということが分かりやすいようにこちらが「ちょうだい」の手を出す。Ａ児は相手の手に物があたるとそのまま離してしまう。物の重さの移動を感じて「相手がつかんだな」と知って手を離すということを私たちは日頃理屈抜きでしているのだろうが、そのことをどう感じさせるか。Ａ児の手を軽く押さえて１・２・３といってから離すなどいくつかの方法を試み、練習を重ねていった。子どもは赤ちゃんの頃、「ちょうだい。」「ありがとう。」ごっこが好きである。その頃からいつの間にか『人に物を渡す』ということを会得していくのだろう。だから「渡して」というと当たり前にするものだと思っているが、Ａ児にはそれが分かりにくい。そのことに気がついたのは昨年の大市の販売活動があったからである。

また、お客さんは必ずしも「ちょうだい」をしてくれるとは限らない。物を一つ渡す場合、袋に入れて渡す場合もある。渡すとき、相手の方や手元を見るということも大切である。どうしても体が横向いたり目がそれる。Ａ児については、日頃から集中するということが課題であり、そのためには今自分のしていることを見ることが大切で、手と目が合うということは大事なポイントである。渡し終わったら、後ろから「ありがとうございます。」と大きな動作で援助することにする。その他にもいくつかの見えてきた課題に、一つひとつスモールスッテプで取り組んでみた。

ごっこ遊びがごっこでなくなる日が来る。これはとても大きな経験であり楽しみだ。

(10) いよいよ大市出店



１月２５日の亀山大市では、大勢のお客さんが店に足を運んでくださり、商品を購入してくださった。「昨年売り切れで買えなかったから」と朝早くから来てくださった方や「昨年購入して効果があったから今年も来た」と言って購入してくださる方もいて、子どもたちもとても喜んだ。お客さんとの接し方にも次第に慣れ、お客さんの質問にはっきりと答えることもできた。購入を迷っている方に声をかける子どもたちの姿からは、自分たちの炭を使ってほしいという思いが伝わってきた。

Ａ児もとても集中していた。Ａ児の父親が今年も応援に来てくれたが、今年は完全に裏方にまわり、子どもたちの活動をしっかり支えてくれた。「Ａ児がとてもいい顔をしている。」と言ってくれたお父さんの言葉が嬉しかった。さらに嬉しかったのは、Ａ児の後ろで「ありがとうございます。」という教師の言葉が、子どもたち全員の声に途中から変わっていったことである。Ａ児はその都度、膝を曲げたり首を傾けた。Ａ児のあいさつであった。　最後のお客さんは、今まで何度か交流した西小学校の４年生の子とお母さんであった。お互いに顔を覚えていて、最後の商品が売れたとき大きな拍手がわいた。隣の店のおじいさんたちも一緒に喜んでくださった。

一昨年は、家族と一緒に来た大市で、お母さんに抱かれっ放しのＡ児であった。昨年は３・４年の子たちと半日一緒にいることができ、今年は、落ち着いて販売活動を共にし自由時間にグループの子たちと他のお店まわりもした。大きなおまけ付きである。

５．学習を終えて

これまでの学習を振り返ると、いろいろな人々との出会いやふれあいの中で、子どもたちが、これまでよりも広い範囲のそして不特定の人へと目が向けられるようになってきたように感じる。また、自分たちの学習や活動を伝えるということを考えると、伝えたくてたまらないということを自分の中に蓄積することや、ことがらやものに対して自分なりの意識をもち、思いや考えをしっかりともつということの大切さを感じた。そして、それを伝える力を継続してつけていく必要がある。そして、自分たちの学習を支えてくださる小川炭サークルの方や地域の方の存在は、子どもたちにとっても教師にとってもかけがえのないものである。

Ａ児にとっても２年間を通して広がりがある活動になった。

関わる人がいるいうことは、必ずそこにコミュニケーションが生まれる。表出言語を持たない（おそらく内言語もごく少ない）Ａ児にも、もちろんコミュニケーション が生まれる。今回の大市では、何人もの人に物を手渡したこと、そして友だちの「ありがとうございます」の声と一緒に、“Ａ児のあいさつ”をしたことである。この日の集中していた姿の底にあるのは、体を通しての学習である炭焼きや商品作りがベースにいつもあり自信や愛着になっていただろうと思われること、３・４年の子どもたちの課題の広がりとともに、Ａ児の活動も同様に広がっていったこと、身近な人から広がって多くの人たちとふれあいを持てたこと、ふれあいが関わりにつながっていったことなどがあるだろう。２年間の積み上げは大きい。昨年があったから今年が見えたし、今年があったから昨年が生きたように思う。何よりも大きいのは、いつも一緒に学習を共にした３・４年の仲間の存在である。

共に学ぶ授業作りをこれからも一つひとつ積み上げていきたい。

ともに生きることをめざして

情報教育を取り入れた
コミュニケーション能力の育成

亀山西小学校

渡辺　忍